

# たけの幼稚園とラジオのおっちゃん(7)

庄籠 しょうごもり 道子

## 「犬とすいが」の巻

もうすぐ夏休み。楽しみやな。今日もプールに入って  
楽しかった。

帰る時間になった。リュックサックを背負ってくつを  
はきかえた。はきかえた子から園庭に並ぶ。村ごとに並  
ぶ。三人組も並んだ。当番のお母さんが迎えに来て、連  
れて帰ってくれるのだ。

どっちが先に並んだかきみなりとかずがもめている。  
あれ？ お迎えのお母さんたちの様子がいつもと違  
う。いつもは門の外でたむろして待つてるのに、きょう  
は、みんな中に入ってきた。そして大騒ぎして門を閉め  
ている。

あ、犬だ。お腹をどろんこにした茶色い大きな犬が道  
のむこうから走ってくる。お母さんたちは「いやー！」  
とか言いながら園庭に入って、あわてて門を閉める。大  
きな犬は門のむこうをうろうろしている。

当番の子がみんなの前に立って「帰りのごあいさつを  
します」と言った。みんな「さようなら」と言った。言い  
ながらも大きな犬が気になってしかたない。大きな犬を  
見ながら、お迎えのお母さんやおばちゃんの所に行った。  
どろんこの大きな犬は門のすぐ外にいる。大きな口か  
ら、大きな舌を出してハッハッハッと息をしている。よ  
だれがたれている。子どもたちの背丈と同じくらいだ。

大きい。犬は門から離れない。みんな怖くて出られない。

まきが泣き出した。ん？ まぎの家は、幼稚園の裏だ。裏門から出る。この大きな犬のいる門は通らなくていい。何で泣くんやろ。

「犬と言え……籠先生！」

と、竹田園長先生が言った。籠先生は、家に犬二匹と猫三匹を飼っている。

「はい。園長先生、ロープか何かありますか？」

籠先生が聞いた。

「教材庫にあるはずや」

籠先生は、走って行って、太いロープを持ってきた。

籠先生は、太いロープを持って、門に近づいた。子どもたちも、お迎えのお母さんたちも見ている。三人組もそつと近づいて固唾を呑んで見守った。

籠先生が門のこつちにしゃがむと、門の鉄の棒をはさんで大きな犬も門のむこうに座った。

座った丈は同じくらいだ。

「ひえー、大きい！ し、しかし、ここでめげては保育

者としての面子がすたる」

籠先生は何やらぶつぶつ言いながら緊張した顔をしている。

「えーと、い、犬は、上から手を出したらたたかれると思うから、し、下から、下から……」

籠先生は、ぶつぶつ言い続けながら、そおつと手を、門の鉄の棒と棒の間から、犬の顔の前に出した。ハアツハアツハアツ……犬の荒い息が聞こえる。

あつ、かまれる！ りょうたは思わず目を閉じた。

でも、籠先生の悲鳴は聞こえなかった。そつと、りょうたが目を開けて見たら、大きな犬は籠先生の手をべろべろなめていた。籠先生がほつとした顔をしている。

籠先生はその手で、大きな犬の頭を撫でた。そして、ロープを首に巻いて結んだ。

「つなぎました。もう大丈夫です」

籠先生が門を開けた。まきが泣き止んだ。

「おとなしい犬です。どないもないです」

籠先生は言った。どないもないなら、なんであんなぶ

つぶつ言つてたのかな。三人組は顔を見合わせた。でも、よけいなことを言つて怒らせたらえらいこつちや。三人組はりょうたのお母さんの後ろについて帰つた。他のみんなも村ごとに帰つて行つた。

「田んぼに入つて遊んだんやねー。どろんこやねー。あろちやろなー」

籠先生が犬を足洗い場に連れていくのが見えた。

さて、翌日のことである。

園庭でみんなで遊んでいたら、幼稚園の門の前に車が止まつた。中からおじさんが出てきた。おじさんは、先生たちに話しかけた。

「きのうは、うちの犬がご迷惑をかけまして……」

「あら、お宅の犬だつたですか?」

「へえ。もうおばあさんの犬でして、おとなしいんですけど、なんせ身体が大きいやろ。幼稚園の子らを怖がらしてしもうて。」

「いいえ、いいえ。かしこい、おとなしい犬ですわえ」

籠先生が答えている。あんなに恐る恐る手を出したことは、もう忘れたらしい。

ぼくたちが帰つてから、先生たちは夕方まで待つたけど、だ

れも犬を探しに来ないので、たけのこ村の駐在所に連絡したらしい。おまわりさんは、保健所に連れて行き、このおじさんが保健所に捜しに行つて連れ戻したらしい。罰金を取られたとおじさんはちよつと残念そうにぼやいた。それから、おじさんは先生たちに聞いた。

「そうそう、すいか、いらんかね?」

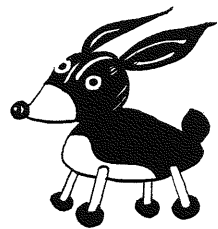
「すいか? います。よろこんで!」

間髪を入れず竹田園長先生が答えた。

「そうか。ほな、ちよつと取つて来るわ」

おじさんは、車に乗つて帰つていった。

それから、お昼のお弁当を食べて、また遊んで、そろそろ帰ろうかと片付けて部屋に入ろうとしていると、門



の前に車が止まった。さっきの犬のおじさんである。

おじさんは、先生たちに、

「門 開けてか。車、中に 入れるで」と言った。

すいかのひとつくらい、かかえて持ってきたらええやん。このおじさん、腰でも悪いんやろか。それとも、か

かえきらんくらい大きなすいかやったりして……。

「みんなー、車が入ってくるから、庭に出たらあかんよー。もちくん、早う、くつはきかえて廊下にあがっておいで」

竹田園長先生の言葉に、みんなは廊下で犬のおじさんの車が入ってくるのを見ていた。

車はぐるーっと園庭を回って、みんなの前にバックしてきた。犬のおじさんは、車から降りてきて、後ろのトランクを開けた。みんなトランクが見える所に寄ってきた。

「はいよ」

「えーっ！」

「うわー！」

「うそーっ！」

子どもたちも、先生たちも、口々に叫んだ。

犬のおじさんの車のトランクには、大きなすいかがあるころと並んでいた。一、二……数えたら七個もあり。丸いすいか、楕円形のすいか……どれも、人の頭より、ずっと大きい。

「この丸いのは中が黄色や。このちよつと長いのはまくらずいか、言うねん。中は赤や」

「えっ？ 黄色いすいかって、普通、小さいですよねー」  
籠先生が聞くと、

「はっはっは。わしが作ったのは大きいんや」犬のおじさんは、うれしそうに笑った。

先生たちが、すいかをトランクからおろした。子どもたちが手伝おうとすると、

「あかん！ 落として割ったら食べられんようになる」と、言っつて、手伝わせてくれんやつた。

「ほななー」

おじさんが乗って帰る車の後ろに、「ありがとうございますでした」と、先生たちは何度もべこべこお辞儀を

た。子どもたちは盛大に手を振った。

翌日、三人組が幼稚園に来てみると、廊下に大きなたらいが出してあり、そこに大きな丸いすいかとまくらすいか一つずつが入っていた。そして、氷水がたつぷり入っている。すいかを冷やしてるんや。うわー、冷たくておいしそう。たらいの横には、丸い大きなすいかが二つ。

「一、二、三、四。あと三つは、どないしたんやろ」

「籠先生が、きのう、僕らが帰った後、食べたんちゃうか」

「えー、三つとも、ひとりでー!?」

三人組がいろいろ推理していると、籠先生がやってきた。た。

「おはよー。きょうは、すいか割りするでえー!」

籠先生は、ごっついはりきってる。

「先生、あとの三つのすいかは?」

としなが思い切って聞くと、

「ああ、たけのこ小学校に二つ持って行って、たけのこ保

育所に一つ持っていった。どっちでも大喜びされたで」  
ああ、なるほど。

すいか割りは、もちろん盛り上がった。すいかを前に竹の棒を持たされて手ぬぐいで目隠しをされる。竹田園長先生が肩を持ってぐるぐると二回まわす。「はい、どうぞ」

先生やみんなが、

「右や」

「違う、左に三歩」

「あー、行き過ぎた。戻って」

とかいろいろ言ってくれるんやけど、えーっと、右つてお茶碗の方だっけ? おはしの方だっけ? とか考えてるとますますわからなくなり、なかなか当たらない。それでも、何回もやって、すいかは割れた。割れたすいかはうさぎに食べさせて、みんなでたらいのすいかを食べた。冷たくてめっちゃめっちゃおいしかった。

(保育研究グループ はるにれ)